

Q13

アレルギーがおこったら どうしたらいいですか？

アレルギーの型はさまざまで、抗がん剤治療を終えて数日たってあらわれる皮膚症状だけの軽症なものから、抗がん剤の点滴を開始直後あるいは点滴の最中に症状があらわれた場合、まれに、アナフィラキシーショックという命に関わるような重症のアレルギーをおこす危険があります。

アナフィラキシーがおこったら、直ぐに抗がん剤の点滴を中止することが大切です。アレルギーの原因である抗がん剤を中止しない限り、症状が秒、分単位で悪くなる危険があります。

アレルギーは全身のさまざまな自覚症状としてあらわれます(表1)。症状が軽いからとがまんせずに、点滴中に何か少しでも異常を感じたら、直ぐにコールをして医療者に伝えてください。

アレルギーのリスクが高い抗がん剤を投与する場合は、予防薬として副腎皮質ホルモンや抗ヒスタミン薬を投与する場合があります、アレルギー症状が起こっても副腎皮質ホルモンや抗ヒスタミン薬を投与することにより、症状コントロールが可能な場合もあります。

(大山高廣)

表1 全身にみられる、さまざまなアレルギーの症状

皮膚や粘膜系	かゆみ、寒け、冷や汗、皮ふが紅くなる、じんましん、口の中の違和感
呼吸器系の症状	くしゃみ、咳、息苦しさ、ぜいめい、鼻みず、のどの違和感
循環器系の症状	動悸、胸を押さえられるような圧迫感、胸の痛み、脈が早い、脈がとぶ、血圧の低下
神経系の症状	くちびるや手足のしびれ、めまい、耳鳴、けいれん、意識の低下、視覚の異常
消化器系の症状	急に便意をもよおす、便もれ、下痢、腹痛、吐き気
泌尿器系の症状	急に尿意をもよおす、尿もれ、尿がでにくい、尿がでない

